

志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植生

小見山 章(岐大・農)

1980年8月志賀高原雑魚川流域・奥志賀から切明までの範囲で、相観によって植生の分布状況を調べた。対象とした地域は、サルの利用度の高い河床からの水平距離1.5 km以内にある両岸斜面である。

河床および近接地には、主としてトチノキ、サワグルミ林、ヤナギ類の林が細長に分布している。斜面中腹には、ブナ林・ミズナラ林・シラカンバ林がみられ、お互いに並列するように並んでいた。これらは二次林の林分構造をもつが、人間による森林利用の結果として、立地環境に対応して分布しているのであろう。急峻な尾根部には、ネズコ・チョウチンゴヨウ・コメツガを主体とする針葉樹林がごく小面積で散在しているが、土壌条件がこれらの分布を左右しているのであろう。1979年度まで調査してきた横湯川流域の植生分布と比較すると、種構成に大きな違いはみられずモザイクの分布を呈しているが、雑魚川でのモザイクの配列は単純である。

1980年9月から11月までの落葉・落枝・落果量を集計すると、ブナ林(文六尾根)のそれらは順に、 $1.06 \cdot 0.100 \cdot 0.081$ 乾重 ton/ha, ミズナラ林では $1.00 \cdot 0.165 \cdot 0.643$ ton/ha, 湿性林(トチノキ・ミズキ)では $1.22 \cdot 0.261 \cdot 0.228$ ton/ha となった。葉量はやや少なめである。

本年度はブナ林での落果量が少なく不作であったが、カエデ類、ミズナラ、カンバ等の種子がトラップに入った。ミズナラ林では比較的多量の落果をみせたが、ほとんどがミズナラの種子で占められていた。湿性林では、ミズナラ、ミズキ、サルナシの種子が主にトラップ内に入っているが、ミズナラが大きな比率を占めていた。調査域を通じて今年度はブナが不作で、ミズナラがかなりの着果量を呈したものと考えられる。

雑魚川流域に生息するニホンザルの生活様式と環境利用様式の研究

斎藤 良裕

雑魚川流域に生息するニホンザルの追跡調査を

行い、秋期と冬期における土地利用の違いを比較する資料を収集すると共に、食性を量的に把握するため、糞、食痕調査を行った。調査は1980年10月、1981年3月を中心に行った。

雑魚川流域では、1971年、1974年の調査で2群が観察されたが、その後、1975年～1980年の調査では、個体数25～35頭の1群のみしか観察されなかった。しかし、1981年3月には、約34頭の群れの他に、14～15頭の群れの足跡が、タキノ沢からホソ沢の間で観察された。また、熟平からセンノジョウ沢の間で、2月～4月にかけて、2頭のハナレザルが時々観察されるなど、1971年以降ニホンザルの利用が観察されなかった上流域での利用が認められた。これまで横湯川流域のB₂群、C群雑魚川流域でも採食が確認されていなかったコメツガを樹皮の総面積にして0.87m²集中的に食べていた。

積雪期と秋に糞を採集し、これらの1部について内容物の同定を試み、大別した。その結果、秋の糞では、サルナシやヤマブドウの実、昆虫、葉等がみられた。全体の約70%を実が占めていた。積雪期の糞では、木の繊維が約60%を占めていた。そしてこの繊維の一部14個を光学顕微鏡を用いて木材組織的に同定を試みた。その結果14個は2種類に分けられ、1種類は不明であったが、もう1種類はモクレン科のものであった。

霊長類前肢における機能解剖学的研究

羽倉 信彦(独協医)

霊長類の上肢の筋に関する解剖学的研究は、古くからあるが、その多くが形態の記載にとどまっている。基礎的データとしての数量化は、筋重量の測定によるものが主であった。しかし筋肉自体は、資料の生前の環境変化を容易に反映すると思われることから、数量化の対象として、適性に欠ける点があると考えられる。そこで、霊長類の上肢の筋の骨面上での付着分布域と、それらの位置的相互関係を調査し、運動様式の多様性が、それらの関係の中に反映されているのを解明することを、今回の目的とした。

共同利用研究期間中には、カニクイザル、リスザルの上肢帯および上腕部を解剖し、上腕骨における主な筋の付着域を観察、計測した。上腕骨長